

FFRangioの精度をBland and Altman 解析を用いた比較及びDefer となった患者予後の検討

林 貞治<sup>1</sup>、八田 瑞希<sup>1</sup>、林 愛里<sup>1</sup>、清水 一真<sup>1</sup>、ルーリント 哲雄<sup>1</sup>、舟山 陸<sup>1</sup>、滝川 千恵美<sup>1</sup>、上澤 翔<sup>1</sup>、渡部 惇<sup>1</sup>、金子 健二<sup>1</sup>、三角 和雄<sup>2</sup>、船橋 伸禎<sup>3</sup>

<sup>1</sup>医療法人徳洲会 千葉西総合病院、<sup>2</sup>医療法人徳洲会 千葉西総合病院、<sup>3</sup>国際医療福祉大学市川病院

【はじめに】医療技術の進化とともに、新しい診断手段に置き換わるのは、時代の趨勢である。当院では年間約 2,000 件の FFRangio を施行している。【目的】FFRangio を 2 解析者が別個に測定し、解析者間の変動を調査する。また、Defer となった患者が 1 年以内に PCI 施行した割合に関する検証を行う。【対象及び方法】FFRangio を計測した 35 名 35 枝を後ろ向きに解析。解析者は各々 3 方向の画像を任意で選択し FFR 値を算出した。また、解析値が 0.81 以上 0.90 未満の 378 件を対象に、1 年以内に PCI を施行した割合を算出した。【結果】FFRangio 計測の際に選択する 3 枚の画像は、LAD では 9 割の症例で少なくとも 2 方向は一致していた。Bland and Altman 解析では、FFRangio の 2 解析者間では、wire FFR よりやや優れていた。また、FFR で不一致であった割合は 15%前後と同等であった。378 件のうち 62 件 (16.4%) が 1 年以内に PCI を施行していた。同様の条件で wireFFR の PCI は 7.5%と FFRangio の割合が多かった。【考察】FFRangio は wireFFR との差と同等の再現性をもっており、冠動脈拡張剤やプレッシャーワイヤーを要さないメリットを考えると、FFRangio は有用であると思われる。ただし、解析者毎で解析値に差が出てしまう危惧についても報告されているため、境界値での測定差異が 1 年以内の PCI 施行率に影響を与えた可能性は否定できない。【結語】FFRangio の有用性が示唆された。しかし、しかし、手作業による測定誤差も多いなど、課題は少なくない。FFRangio の利点・欠点を十分理解し、複数名で解析するなどの対策は必要である。